



Title	デジタル染色と琳派的デザイン手法による『羽裏』 : 「月待ちに 写り移ろうかがみ池 櫻花おもほゆ 白銀の楼」
Author(s)	大森, 正夫
Citation	デザイン理論. 2016, 67, p. 106-107
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56372
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

デジタル染色と琳派的デザイン手法による『羽裏』 —「月待ちに 写り移ろうかがみ池 櫻花おもほゆ 白銀の楼」— 大森正夫／京都嵯峨芸術大学

はじめに（作品制作の背景）

本阿弥光悦が徳川家康から京都・鷹峯の土地を拝領した元和元年（1615）を琳派誕生の起点とした2015年は、琳派400年の年にあたる。そこで、琳派の美意識を最も大きく受けたとされる着物の美、なかでも羽織の裏地「羽裏」に焦点をあて、琳派の造形理念の再考とともに、琳派的表現を念頭においた「羽裏」をデザインした。

また、きもの文化を支える伝統産業である京友禅にも新しい技術と時代の表現との融合が課題となっている。そこで、コンピューターグラフィックを活用したデジタルプリントでの友禅染に熟練の手技を施した実験的な作品制作を共同制作によって試みた。

羽裏について

羽裏とは羽織の裏地に使う生地（布）のことをいう。しかし、奢侈禁止令が出ていた江戸時代、派手な着物を着ることが出来なかった中で考えたお洒落のひとつに、豪華な絵柄を裏地や長襦袢に忍ばせることであった。着物の世界では、表よりも裏地に凝ったものや、色の鮮やかなものを「裏勝り」と呼ぶのであるが、着物を楽しむ人たちには、着姿からは見えない羽裏は、まさに脱いで初めて他人に見える「裏勝り」の美として人気がある。日本人が好む見えないところに凝る「粹（すい）の美」である。

羽裏の仕立て

この作品は、京友禅の老舗工房・（株）野村染工のデュボンサイエンス社のインクジェットデジタル染色機『DuPont Artistri Digital Printing for Textiles』によって染色

した正絹^①に、友禅職人の手技で銀箔仕上げを施した反物を、羽織に仕立てたものである。



琳派の「粹」

「琳派」は、本阿弥光悦・俵屋宗達から尾形光琳・乾山の兄弟へ、さらに中村芳中・酒井抱一を経て、明治期の神坂雪佳に至る流れを指している。多くの作家による表現は多岐に渡るが、私淑によって継承された作風には、日本人の美意識の特質と言われるデザイン性に富んださまざまな特徴を挙げることができる。しかし、この羽裏のデザインでは、次の手法に注目した。大胆なトリミング、パターン化、省略・抽象化、たらしこみ、俯瞰視、時間の推移、そしてアシンメトリカルな二曲一双（隻）などの描法や構成法である。

また、それらの概念操作的芸術観に潜む京の数寄者特有の「粹（すい）」の美を加味した。これは江戸の「粹（いき）」と比較されるが、他者への瞬発的な表現姿勢ではなく、永続的な生活文化から生まれる内なる日本美の世界が、琳派の表現には不可欠と考えた。

歌詠みの絵画化

さらに「琳派」は、江戸時代からの流れで

はない。そもそも琳派は「やまと絵」の伝統を受け継いだものであり、その作風には豊かな装飾性と共に叙情性も漂うところに特徴がある。光悦・宗達も和歌に通じていたが、琳派の作画には平安文化全体に通底する和歌と関わりが深く、季節を写し取り、心の機微を現すという特徴がある。時代を超えて連綿と日本人の心を支える自然観を代表する花鳥風月など、身近な自然をモチーフとした文様や歌は公家から庶民の間にまで広まり、歌の世界とともに琳派文様は日本人の心を捉え、歴史を超えて愛され継承されてきたのである。

この表現手法の継承性に「粹（すい）」があり、単なる装飾美ではない和歌や芸能を知り尽くした数寄者の風景が形成されているのである。そこで、羽裏のデザインには、季節と心情を詠む「和歌」での表現とした。

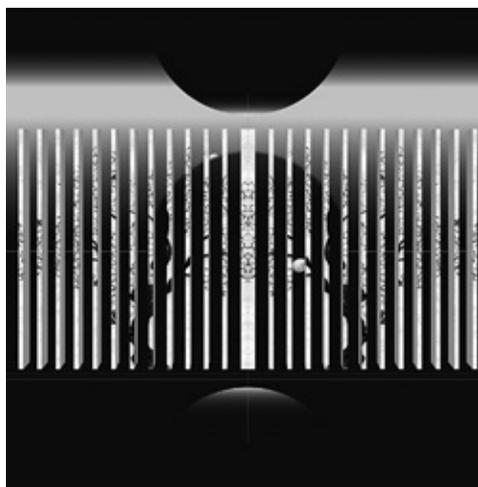
羽裏のデザイン～観月の美

琳派の「粹」なデザインに不可欠な永続的なテーマとして、平安期より時代を超えて日本文化の慣習美になっていた「観月の宴」を取り上げた。そこでのストーリーについては、既往研究⁽²⁾において発表済みなので割愛するが、東山文化の拠点施設・東山山荘（銀閣）における「十三夜の観月」世界が相応しいと考え、一首の歌に詠んだ。

『月待ちに 写り移ろうかがみ池
おうか 桜花おもほゆ しらがね たかどの 白銀の楼』

東山での宴にて、銀閣1層の広縁から待ち臨む月待山に覗いた月を眺め、銀閣2層に移り、華頭窓から眼下で揺らめきながらも池に照り映る月を堪能した後は、格子窓を閉じて、見終わった後の余韻の艶やかさは目にも心にも焼きつき、その艶やかさは晩秋にも関わらず春爛漫の如しの楼閣であった。

この一首の意味を絵画化したのであるが、背で縫い合わせる羽裏地の特性を生かして、観月での一連の風情と心象を円と格子を用い



てダイナミックシンメトリーに整えた。

3つの大きな円では、雲と山・池と縁台に照る月光を現した。緑に染めた山から顔を覗かす左上部の月には上空の雲に明かりをさし、青く染まった池の右中央の月には揺らめくブレやぼかしで染め、見下ろす俯瞰視点はCADでの直線状のワイヤーフレームを僅かに残し染色できる限界の細さで染めた。

月景色は、時間差はあるものの目に焼きついた実際の姿であるが、障子を閉めた後に残像として見えてくる心象風景は満開の桜に喩えられる虚像である。桜花は和紙に岩彩で描き、その画像をスキャンし、閉じた障子窓の格子にトリミングしながら写し、実像の観月との虚実が交差並存する歌世界の重層性を現した。最後に、遠近感と視線を強調した幅違いの縦格子側面に銀粉を熟練の友禅職人によって吹き付け、静的な構図の中に羽織の奥まで広げて眺めたくなる煌びやかさを加えた。

- (1) グラフィック友禅・シルクアーティストと称する商品は、京都友禅振興協議会によって正統な京友禅の反物に認定する証紙が貼付されている。
- (2) 大森正夫「月待ちの意匠——銀閣の設計手法における東山文化の美意識——」デザイン理論 No. 66 p. 76-77